

文学部 1年

吉田 巖嗣

ネパール

2020年2月7日-

2020年3月21日



渡航概要と内容

1. はじめに

アンナプルナ・ヒマールのふもと、ミャグディ郡チトレ村（標高 2390m）に合計 3 週間滞在して、フィールドワークをおこなった。さらに、カリガンダキ川上流のジョムソン、ムクティナートまで足をのばし、トレッキング・ルートのあるきながら、かんたんなききとりや観察をした。

わたしは地理学・文化人類学・民族植物学に関心をもっており、これらの学問の初歩的な実践をこころみることを、この渡航のひとつの目的としていた。また、わたしは、日本の漁村でのフィールドワークの経験から、コミュニティのなかの役割分担・分業のありかたに興味をもっていた。人口の増減、世代構成の変化にともなって、役割分担はコミュニティを維持するために、どう機能し、どう変化していくのか。このかんがえをネパールでふかめてみたいという希望もあった。

なぜヒマラヤをめざしたのか。そのきっかけは、ずいぶんまえまでさかのぼってみると、川喜田二郎の『鳥葬の国』をよんだことだった。この本は、ネパールの奥地トルボ地方へはいった探検隊のフィールドワークの記録である。わたしはこれにふかく感銘をうけた。それ以来、わたしはヒマラヤへのあこがれをつのらせた。そうはいいつつ、本のなかの、どこかとおい世界だともいこんでいる節があったことは否定できない。ヒマラヤにいく日が、これほどはやくくるとは、おもってもみなかったのである。

2. 出発まで

計画の段階では、目標をつぎのようにさだめた。

- (1) ヒマラヤ高地の生活様式（とくに在来の農牧業・手工業）をしる。
- (2) トレッキング・観光業やネパール地震が村の生活にどういった影響をおよぼしているのかをしる。
- (3) 周辺の村むらの立地する環境を比較・考察する。
- (4) 野外科学の方法を実践・習得する。

計画をたてるにあたっては、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の藤倉達郎教授、東南アジア地域研究研究所の安藤和雄教授、トリブバン大学植物学教室のチャンドラ・ポクレル教授の指導をあおいだ。

当初の計画では、首都カトマンドウの北方、ランタン国立公園の周辺に滞在する予定だった。しかし、この地域は 2015 年のネパール地震でおおきな被害をうけて、いまだ復旧したというには、ほどとおい状況であることがあきらかになった。現地を訪問した ASAFAS の院生にきいた話では、先にすすむことを村のひとびとにとめられた、ということだった。地震のひきおこした地すべりで、たくさんのひとがなくなった村をとおると、わるい夢をみたり、よくないことがおこったりする、といううわさがたっているそうである。そのような状況では、安全にフィールドワークをおこなうことはむづかしいと判断し、計画を変更することにした。

かわりの滞在地として、候補にあがったのが、ネパール中部のアンナプルナ・ヒマール周辺である。この地域は、いまでは地震の影響はほとんどないようだった。アンナプルナのふもとは、比較的ふるくからひらけていた土地であり、すでにおおくの調査がおこなわれているし、トレッキング・ルートもよく整備されている。

正直にいうと、わたしはこの候補地にあまり期待できなかった。わたしは、できることなら手つかずの土地にいったみたかった。やるからにはパイオニア・ワークでなければならない、とおもった。しかし、現実的にかんがえれば、はじめての単独での海外渡航だから、無難な選択をしておくほうがよい。そして、なによりも、はじめてから成果をだそうと躍起になっていては、もっとだいいじなことを見おとしてしまうかもしれない。今回はむりをせず、はじめてみるものをすなおにみて、かんがえてみることにしよう。

こうして、目的地はアンナプルナにきまった。

3. 旅のできごと

〈カトマンドウ〉2月7日—9日

タがた、大韓航空の便で、トリブバン国際空港に到着する。カトマンドウの中心部、タメルの宿におちつく。タやみのなか、はじめてみたカトマンドウは、混沌とした印象である。

翌日、土曜日は公休日である。官公庁や大学はもちろんのこと、ふつうの商店だって、そのおおくが、やすみになる。タメルは観光客があつまる地区で、みやげもの屋とか、レストランがおおい。しかし、ち



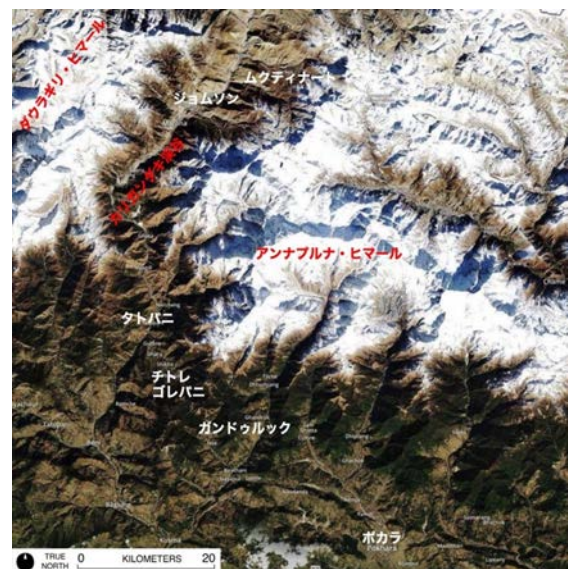
カトマンドウの露天市

よっと足をのばすと、生活のにおいのする街角があらわれる。野菜、果物、香辛料、魚などの露天市がひらかれていた。

日曜日、トリブバン大学のチャンドラ・ポクレル先生をたずねる。わたしはアンナプルナ・サーキットを一周するつもりでいたのだけれど、それはやめておいたほうがよいと、ポクレル先生はいう。冬の 5400m の峠ごえは、あまりに危険だから。かわりに、アンナプルナ南縁の標高のひくい地域、ゴレパニとガレ・ガウンの周辺がよいだろうと提案された。事前に依頼をしておけば、現地の学生がアシスタントとして同行することもできたという。今回は、ひとりでフィールドワークをおこなうことになった。

〈ポカラ〉2月10日—11日

カトマンドウからバスで7時間。ポカラはフェワ湖のほとりの町である。ここで2種類のトレッキング許可証を取得した。トレッキング・ガイドをやとうことも検討したが、予想以上に費用がかさむことがわかった。予定しているルートなら単独行でも問題ないだろうと、宿の主人からきいたことから、ガイドなしでいくことにきめた。



アンナプルナとカリガンダキ溪谷 (Field Papers を経由して取得した Mapbox Satellite の画像を改変)

〈ガンドゥルック→ゴレパニ〉2月12日—15日

トレッキングの出発地の村ガンドゥルックまで、バスにゆられて未舗装の山道をいく。

あくる朝からあるきはじめる。ムルダイというピークをへて、ゴレパニにいたるルートをとる。ザックのおもさは20kg ちかくあって、あるきはじめてから後悔した。標高をかせぐにつれて、と

ころどころ積雪がでてきた。一日でドバトまでいくつもりだったが、日がくれてきたため、イシヤルでとまる。

翌日、ドバトをへて、ムルダイをこえる。このあたりは、トレッキング・ルートが開通する以前は、おおきな集落はなく、家畜を放牧する草地（カルカ）しかなかったと、ドバトでロッジを経営するグルン*のおじさんにきいた。標高 3637m のムルダイの峠を、つよい風がふきぬける。ふりかえると、アンナプルナ南峰・マチャプチャレをはじめとするアンナプルナ山群がまぢかにせまってくる。はるか北の空には、ダウラギリをのぞむことができた。



ムルダイの峠付近からみたアンナプルナ山群

デウラリからゴレパニへ。ゴレパニは、数十軒のロッジ、レストランがたちならぶ峠のうえの町である。たいへん観光化している印象をうける。ここには滞在せず、先をいそぐ。

* チベット・ビルマ語系の民族。アンナプルナ周辺にひろく居住している。

〈チトレ〉2月15日—3月1日

ゴレパニからの街道をくだっていく途中、木の枝を刈ってたばねているおじさん（ブッディ・バハドゥール・ガルブジャさん）にであった。スイギュウのえさにするカルシュという木だという。その作業を見学させてもらいながら話をきいた。これがきっかけになって、ブッディがいとなむロッジにしばらく逗留して、チトレ村でフィールドワークをすることになった。

わたしはいちおう、代金を支はらう客としてロッジに滞在したのだけれど、ブッディとその家族（おかみさんのラクスミ、息子のエリック）は、わたしの意図をよく理解してくれた。わたしは自由にかれらの仕事についていくことができたし、かれらは積極的にいろいろなこと——植物の名まえや地名、村のことなど——をおしえてくれた。

チトレの日々は、だいたいこんなぐあいだった。

朝食は、カロ・チャ（砂糖・コショウをくわえた紅茶）と、チャパティかローティ（無発酵のパン）でかんたんにすませる。ブッディは、朝の仕事にでかけていく。畑の小屋をあけて、スイギュウにえさをやり、乳しぼりをしたりする。それから、スイギュウたちを小屋からだして、放牧地まで追っていく。日によって放牧地はかわる。あるときは林のなかの草地、あるときは小学校のグラウンドである。その



朝、スイギュウを放牧地へ追っていく

あと、畑にもどって、家畜小屋の掃除、野菜の世話などをする。

ひと仕事がおわると、10 時か 11 時ちかくなっている。家にかえると、ラクスマが食事をつくってまっている。これは軽食というわけではなくて、ちゃんとダルバート（ご飯、マメのスープ、ジャガイモ・野菜のいためものの一式の食事）をたべる。一日の食事は、昼まえと夜の 2 回が本式で、そのほかに朝と昼すぎに軽食をとる。

食事のあと、ブッディは山にガス・カティヌに行く。ガス・カティヌというのは、grass cutting という意味のネパール語である。スイギュウのえさを刈りにいくのである。カルシュ、タッパ、ボヤスといった木の葉がえさになる。ブッディは、かるがると木によじのぼって、鎌で枝をおとしていく。1 本の木がはだかになるまで、そう時間はかからない。こんどは、地面におとした枝をひろいあつめる。ふとい枝はきり

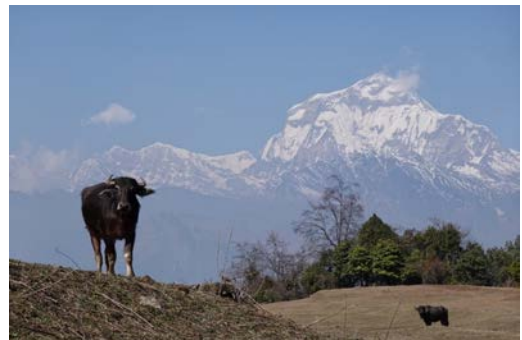


刈りおとした枝をたばねる

おとして、葉っぱのついたほそい枝をたばねていく。かさのたかい枝の山ができあがったら、ロープでしめあげる。額に幅のふといひもをかけて、この束をせおい、家まではこんでかえる。

ブッディが林で仕事をしているあいだ、ラクスマは畑の世話をしたり、料理をつくったり、薪をとりにいったりしている。息子のエリックは、野良仕事が好きではないらしく、もっぱら家にいて、掃除をしたり、たまに料理をつくったりしている。

3 時ごろに軽食。夕がたになると、ブッディはまたでかけていって、スイギュウを小屋にもどし、えさをやる。夕食は 7 時ごろである。ほぼ毎日、ダルバートをつくってたべる。ゴレパニやタトパニからやってきた地元の客が食事をしていくこともある。



スイギュウとダウラギリ主峰

ある日、わたしは風景のスケッチをしていた。ウッティス（ハンノキ）の林のむこうにアンナプルナ南峰がそびえている。草地に腰をおろして、スケッチブックをひらいた。半分くらい仕あがったとき、とおくからふたりの青年がやってきた。かれらは「なにをしているんだ？」とわたしにきく。わたしは、かきかけのスケッチをみせる。かれらはちょうど枝うちに行くところだという。わたしはふたりについていくこと



ウッティスの林のむこうにアンナプルナ南峰をのぞむ

にする。途中で、ほかの男たちと合流して、林にむかう。

わたしに声をかけてきたのは、30 歳のスレス、21 歳のミランのふたりである。わたしは、かれらから「サノ・バブ」というニック・ネームをもらった。「ちいさい少年」という意味である。かれらはいう。「サノ・バブ！ 枝うちをやってみないか」。わたしはよろこんでやらせてもらった。

こうして、スレスとミランをはじめ、いくにんかの青年たちと、わたしは知りあいになった。



枝うちをやらせてもらった

3 月がちかづいてきた。そろそろ、つぎの目的地へむかうべきときだろう。ポクレル先生のアドバイスにしたがえば、アンナプルナ保護区域内の東南にあるガレ・ガウンに行くことになる。けれども、カリガンダキ川の上流地域にいかうと、わたしはきめた。チトレであうひとがみな、上流の聖地ムクティナートにいてみるよう、すすめるからでもあったし、ここよりも寒冷・乾燥した高地の生活をいちどみておきたいとおもったからでもあった。

出発がちかづくにつれて、わたしは多少、感傷にも似た気持ちを感じるようになった。たった半月いただけだが、チトレのくらしは、はなれがたさを感じさせるほど、なじみぶかいものになっていた。

〈チトレ→タトパニ→ジョムソン〉3 月 1 日—2 日

ファラテ、シーカ、ガーラの村をへて、標高 1200m のタトパニまでくだっていく。チトレから徒歩で半日。タトパニは有名な温泉地である。このあたりでは、比較的温暖な気候でそだつ作物が栽培されている。わたしがみたかぎりでは、ヤシ、ミカンがあった。コメもつくっているようだ。ちょうどミカンの季節だった。

タトパニからジョムソンへ、カリガンダキ川ぞいをバスで移動する。9 時半にくるはずだったバスは、12 時をすぎてから、ようやくやってきた。道がわるくて、車体がこわれそうなほど、ゆれる。窓枠にたびたび頭をぶつけながら、その景色を観察しているうちに、植生は照葉樹林から針葉樹林へとかわった。平屋根の家々がふえてくる。チベット仏教の五色の旗がはためいている。たった 4 時間の行程のうちに、荒涼としたチベット高原がちかづいていることを実感する。

ジョムソンは、風の谷とよばれるほど、つよい風がよくふく土地らしい。夕がた、ジョムソンの町のはずれまで散歩にいった。岩と砂のむきだしの山はだに、草木はぽつぽつとはえているにすぎない。その草木も、チトレのあたりとはすっかりちがうので、わたしにはわからない。

アンナプルナを一周するつもりでいたときは、このジョムソン周辺に滞在する予定だった。い

ざ、こうして現地にきてみると、ジョムソンはおもっていた以上に都会だった。

〈ジョムソン→ムクティナート〉3月3日—4日

徒歩でムクティナートをめざす。ジープとバスもでているが、それではあまりに興味がない。自動車のスピードははやすぎて、道端のおおくのものを見おとしていってしまう。あるいてみなければ、みえないものもあるのだ。褶曲した岩はだをみせるカリガンダキの谷にそうていくと、11時ごろ、カグベニの村につく。カグベニからさらに北にいけば、かつて自治邦だったムスタン王国の首都ローマンタンに



ジョムソンからカグベニへ

いたるのだが、この地域にはいるためには特別なトレッキング許可が必要である。ここで、カリガンダキ渓谷をはなれて、東の尾根にのぼる。荒涼とした風景のなかをあるいて、タガた、プタックの村につく。ひと気のないう集落で、宿は1軒しかあいていなかった。

翌朝、プタックを出発し、昼ごろ、ムクティナートに到着。ムクティナートは、ヒンドゥー教と仏教の聖地であり、ネパール国内だけではなく、インドからも、おおくの観光客と巡礼者がおとずれる。インド人の修行者ふたりにつかまって、100ルピーずつもお布施をはらわされた。カグベニにひきかえすまえに、ジャルコット村のチベット仏教寺院をたずねた。

〈ムクティナート→カグベニ→タトパニ〉3月5日—10日

ジョムソンにかえる途中、カリガンダキの本流をはなれて、枝谷の奥のルプラ村まで往復する。ここは、西暦1200年ごろに成立したというふるい村であり、仏教以前の宗教、ボン教の寺があることで有名である。ムスタン郡では唯一、ボン教の信仰がつづいている村だというのが、それはほんとうだかわからない。さむざむとした村だった。屋上で穀物をひろげているおばさんがいた。米粒に似たかたちの赤茶色の粒だが、わたしにはなにか判別がつかない。おばさんによると、これはロツコルという穀物で、酒の原料にするという。わたしがしばらくみていると、おばさんは「エポールを買わないか」といつてきた。エポールとは、アップルのことだった。けっきょく、リンゴ3個と干しリンゴ1ふくろを、うまいこと売りつけられてしまった。



穀物を屋上にひろげる

昼ごろ、ジョムソンにかえってきた。そのまま、タトパニまであるいてかえることにした。約46km、

3-4 日間の徒歩旅行である。この日は、マルファ村でとまる。1900 年にここをおとずれた僧・河口慧海*の記念館があったのだが、ただの倉庫と化していた。

つぎの宿泊地カロパニでは、雪にみまわれ、滞在を一日のばすことになった。その日の夕がた、宿に日本人の団体がやってきた。これはめずらしいことだった。トレッキングをはじめてから、日本人ばかりか、西洋人にさえ、であう機会はすくなかったのだ。かれらは、地学をまなぶ学生のヒマラヤ野外実習ツアーの一行だった。引率の吉田勝先生は、大阪市立大学を退職したあとゴンドワナ地質環境研究所を設立して、毎年この野外実習プログラムを開催しているそうである。おもいがけぬ縁であった。

翌日、ティティ湖により道をしてから、ガサでとまる。そのつぎの日にはタトパニにかえた。ほんとうは、このルートのどこかで、1 週間ほど滞在できる村をみつけたかったのだけれど、よいとおもえる場所がなかった。いっぽうでは観光化がすすみすぎてフィールドワークがやりづらそうだったし、もういっぽうのひと気のない閑散とした村では話をきく相手があまりいなかった。こうして、わたしはすみなれたチトレにもどることになった。



ティティ湖のほとりでみた家畜。
ヤクとウシの交雑種か

* 河口慧海（1866-1945）は、黄檗宗の禅僧であり、仏教の經典の原典をもとめてチベットに密入国した。その旅行の全容は、『西藏旅行記』にくわしくしるされている。

〈チトレ〉3 月 11 日—18 日

ふたたびチトレにすみこみはじめた。まえの滞在とおなじような日々がつづいた。毎日のように、ブッディの枝うちに同行し、植物の名まえをおぼえようと努力した。かわらないようでいて、フィールドワークは着実にすすんだ。ひとつだけ、とりたててかくべきことは、ヒンドゥー教の祭祀（プジャ）を見学したことである。

じつは、前半の滞在期間でも、わたしはプジャをみた。ブッディの家では、ビクラム暦にのっとり、毎月、エカドシ、オンシ、プルニの日にプジャをしていた。このほか、2 月 21 日（西暦）は 1 年に 1 回のシバラトリというとくべつなプジャがあった。ふだんのプジャは、台所の祭壇に火をともし、門口に線香をたて、イトスギの葉と赤い粉をおいておくだけだが、この日のプジャは寺院にひとがあつまっておこなわれた。



線香とイトスギと赤い粉

後半の滞在でわたしがみたのは、それとはちがって、親族だけでおこなわれるものだった。ピトリ・プジャという。わたしはブッディについて、その場に参列させてもらった。午前10時、チトレとファラテの村ざかいの沢べりに、ブッディとその兄弟たちがあつまり、プジャの支度をととのえはじめる。ひと組、ふた組と、親戚がやってくる。おじさん、おばさん、わかい女性たち、ちいさい子。昼ごろには一同がそろった。儀式がおこなわれると同時に、鍋が火にかけられている。儀式の宗教的な意味あいについては、わたしは知らない。植物の葉でつくった皿の上に、たべものや花、なにかの実をのせて、かざりつけ、川に皿をうかべてながす。一連の儀式がおわると、もちよったローティ（無発酵のパン）やタルカリ（野菜のおかず）、鍋でつくったキール（乳がゆ）の会食がはじまった。食事のあと、おとなたちは話しあいをする。親戚が会する数すくない機会なのだろう。すべてがおわったのは午後2時ごろだった。



チトレでお世話になったふたり



畑にたつ石づくりの物置は、かつては家だったという



畑仕事をしているひとたちから、お茶をごちそうになった。ミントをひたしてのむ



カルシュの木の枝うち



アル・タルカリをつくる

〈チトレ→ゴレパニーポカラ〉3月18日—19日

チトレの日々はあっというまにすぎて、とうとう山をおりる日がきた。ネパールに滞在する1ヵ月半の半分は、チトレにいたことになる。もうとうぶん、ここにかえってくることはないだろう。知りあいになった青年スレスは、以前、わたしにこういった。「こんどくるときは、家族といっしょにきてくれ」



ウレリのちかくでみたヤギの群れ

ゴレパニ峠をこえて、パンタンティ、ウレリ、ティケルンガの村むらをとおりぬけ、谷をくだっていく。

峠のこちら側は、ゴル・コーラ谷のみなれた景観とはちがって、もっと谷がふかくて、集落のまわりに平地がすくない印象をうけた。ヒレからバスにのって、タガタにはポカラについた。5週間ぶりにかえってきたポカラは、大都会にみえた。

〈カトマンドウ〉3月20日—21日

ポカラからバスで到着したその日の夜、たいへんなニュースがはいった。ネパール政府は、22日から3月末まで、すべての国際線の発着を停止することを決定したのだ。コロナ・ウイルスの感染拡大を防止する策である。在ネパール日本大使館からの情報がややおくれてはいつてきた。国内の長距離移動も制限されることになるそう。わたしが予約していたフライトは、23日の出発だ。これでは帰国することができない。あわてて翌日の朝のフライトをおさえた。エア・インディア、デリー経由の便である。もしかしたら日本人は搭乗を拒否されるおそれもある。

あくる朝、タクシーでトリブバン空港にむかう。ぶじチケットはとれた。出国手つづきもすんだ。こうして、わたしはあわただしくネパールを脱出することになったのである。お世話になったポクレル先生に、お礼をいうことはできなかった。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

〈チトレの農耕と牧畜〉

この節では、わたしがチトレにいたときに見きしめたことを、かんたんに報告したい。合計3週間という短期間の滞在だったから、じっさいの観察よりも、ききとりの比重がおおきくなった。観察でえたデータは、わたしが滞在していた期間においては、という限定つきである。農耕と牧畜とを関連させて説明しようとしたところ、同様の事項に関する記述がとびとびになってしまった箇所がある。森林利用については、牧畜に関する側面からのべるにとどめ、燃料・建材そのほかの利用については説明できなかった。

(1) 集落と住民

チトレは、ゴル・コーラ谷*左岸にいくつか存在する集落のひとつである。ゴレパニからタトパニにいたる街道（トレッキング・ルート）にそうて、数十軒の家屋と畑が点在しており、路村・散村的形態が混在している。近隣のシーカが集村的形態をもった比較的ふるい集落であり、スワータ、ファラテなどがそののち自然発生的に形成された散村集落であることをかんがえると、チトレは後者と同様に比較的あたらしい時代にひらかれた集落であるとかんがえられる。

住民は主として、チベット・ビルマ語系のマガールのひとびとである。基本的な生業は、スイギュウの飼育と、ジャガイモ、トウモロコシの栽培のくみあわせであり、一部のひとはトレッカーむけのロッジ兼レストランを営んでいる。近年は、都市部への人口の流出がすすんでいるとみられる。

表1 ギル・コーラ谷周辺のおもな集落

集落名		標高 (m)	立地	備考
ゴレパニ	Ghorepani	2860	ゴレパニ峠	ホテル多数
チトレ	Chitre	2390	ゴル・コーラ谷左岸	滞在地
ファラテ	Phalate	2270	(同上)	
シーカ	Shikha	1935	(同上)	マガールの大集落
ガーラ	Ghara	1700	(同上)	バウン、チェットリの大集落
スワータ	Swanta	2214	ゴル・コーラ川右岸	ファラテの対岸に位置
タトパニ	Tatopani	1190	カリガンダキ川右岸	温泉地

つづり・標高はHimalayan Map House社の10万分の1地図「Around Annapurna」による。

(2) 耕地と作物栽培

このあたりの耕地は、ほとんどが斜面を階段状に整地した段々畑となっており、この段々畑の各段は、その上下の段とゆるやかなスロープでつながっている。この特徴的な畑のかたちは、後述するスキいれの方法にむすびついている。

畑にとなりあって、ビニール・ハウス、家畜小屋、物置などがあることがおおく、畑の敷地内に家屋がある場合もある。いくつかの所有者の畑があつまって、しばしば、おおきな区画をつくっている。このような畑の区画は、基本的に石垣や柵でかこまれており、草地、森林、道路とへだてられている。垣根のうえにトゲ性の灌木が植えられていたり、有刺鉄線を張った柵があったりもする。これらは、放牧されている家畜が畑に侵入して、作物をたべたり、ふみあらしたりす

ることを防止している。

表2 チトレのおもな作物とその時期

作物の種類	現地語名	月（西暦）											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ジャガイモ	アル		△	-----	-----	-----	○	-----	●				
トウモロコシ	モツカイ		△	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	○		
ムギ類	ウォウア								△	-----	-----	○	
(同上)	(同上)	-----	-----	-----	○						△	-----	
カボチャ	クービンルー				△	-----	-----	-----	-----	-----	○		
キュウリ	カーカラ				△	-----	-----	-----	-----	-----	○		
メロン	コレラー				△	-----	-----	-----	-----	-----	○		
トマト	ゴルベラ				△	-----	-----	-----	-----	○	-----	-----	●
マメの一種	シミ				△	-----	-----	-----	-----	-----	○		
キャベツ	バンダゴビ				△	-----	○	-----	-----	-----	-----	-----	-----
ニンジン	ガージャル							△	-----	-----	○		
ヤーコン	ブイシャウ	-----	○		△	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
ニンニク	ラスン	-----	-----	-----	-----	○		△	-----	-----	-----	-----	-----

記号：△種まき・植えつけ ○収穫 ●収穫終了（とくに収穫時期がながいもの）
出所：2020年2-3月のフィールドワークにもとづいて作成。

とりわけ重要な作物が、ジャガイモとトウモロコシである。ムギ類を栽培する家もあるが、一部にかぎられるようである。ジャガイモの植えつけは2月、収穫は6-7月のある程度ながい期間におこなわれる。ジャガイモを収穫した半月から1ヵ月後に、一部のひとはムギ類を植える。これは11月ごろに収穫される。トウモロコシは、ジャガイモよりすこしおくれて2-3月に植えつけ、9-10月に収穫する。トウモロコシのあと、10月にムギ類を植え、翌年の4-5月に収穫する。このムギ類は、ジャガイモのあとに植えるものとおなじ品種だという。

主食とする穀物はコメ（チャーモル）、シコクビエ（コド）などであるが、これらはチトレでは栽培されていない。ゴル・コーラ谷では、コメはガーラなど、シコクビエはファラテ、シーカ、ガーラ、スワータなど、標高がひくくて比較的温暖な地域で栽培されているようである。

ここにあげた野菜・マメ類は、なんらかのデータがえられたものだけであって、じっさいに栽培されている品種はこれよりもおおい。ききとりをおこなった時期が限定されているため、この時期（3月）に種まき・植えつけをする作物の数がかたよっておおくなっている。まんべんなくデータを入手できたわけではない。

トマトは、ビニール・ハウスで栽培される。キュウリは、ビニール・ハウスでそだてることもあれば、そとの畑に植えることもある。マメの一種（シミ）は、トウモロコシの植えつけの1ヵ月後、おなじ畑でそだてる。

このほか、カラシナ（ラヨ）、ダイコン（ムラ）、ブロッコリー（カオリプロール）、コリアンダー（ドニア）を栽培したり、ジャガイモ・トウモロコシ畑にはえるティテサやモーシャンゲサという野菜、菜の花（トリー）、ミントを利用したりしている。垣根に自生する野草の一種（スィースヌー）を食用にすることもある。

(3) 家畜の放牧

飼育される家畜は、スイギュウ、ウシ、ラバ、ヤギ、ニワトリがいる。わたしが滞在していた家では、家畜はスイギュウ 9 頭（そのうち 2 頭は親、7 頭は子）だけを飼っていた。そのため、そのほかの家畜については、じっさいに観察する機会があまりなく、ここにあげた情報の大半はききとりによっている。

スイギュウとウシの放牧のとき、家畜の群れに番はつかない。朝に小屋をでて、夕がたにかえってくるまで、これらの家畜は外を自由にあるきまわっている。そのため、さきにのべたような、畑の垣根をもうける必要があるのである。放牧地の牧草がじゅうぶんにある 6-8 月にかけては、4-5 日から 1 週間ほど、小屋にもどさずに放牧することもある。スイギュウとウシは、一年をとおして集落の周辺で飼育される。



スイギュウのこども

チトレにおけるヤギの飼いかたは、ちょっと特殊であるらしい。ここではヤギの頭数はすくなく、飼育している家もごくかぎられている。ヤギは、そとで放牧することなく、家の敷地内で飼っているようだ。ほかの集落では、ヤギとヒツジがいっしょに飼われていることがおおいようだが、ここにはヒツジはいなかった。ちかくのスワータには、ヤギとヒツジがあわせて約 150 頭いるそうである。この規模の群れになると、ふつうに森林で放牧するということだ。

ゴル・コーラ谷で飼育されているヤギとヒツジの季節移動について、表 3 にまとめた。基本的には、3-4 月から 11 月のおわりまでは寒冷な地域、12 月から 3-4 月にかけては温暖な地域への移牧がおこなわれている。夏の放牧地はカリガンダキ川上流、冬の放牧地はゴル・コーラ谷、あるいはゴレパニ峠のむこうがわの村むらである。ここからは、ヤギとヒツジの群れがチトレに滞在することはほぼないことがわかる。ただし、3-4 月の一時期、ほかの村のひと



木の葉をたべるヤギ

がチトレ周辺で 200–300 頭の群れを放牧することがある。このとき、放牧の謝礼金が発生するときいたが、土地の所有者個人に支はられるのか、村の共同体に支はられるのかといったことはききそびれた。また、これも補足的な情報だが、ダサイン、ティハールというおおきなまつりがひらかれる 10–11 月の時期、まつりの供儀にするため、一部の家畜をカトマンドウ、ポカラ、チトワンといった低地につれていくという。

表3 ヤギとヒツジの移動

時期	移動先
3–4月	寒冷地へ（ガサ、マルファなど） （ほかの村のひとがチトレ周辺で一時的に放牧することもある）
10–11月	ダサイン、ティハールの時期、まつりの供儀にするため、カトマンドウ、ポカラ、チトワンなどへ
11月のおわり	温暖地へ（ガーラ、ウレリ、ティケルンガ、ダンプス、ジリブラン、ガンドゥルック、ファラテ、ゴッラカルカなど）

出所：2020年2–3月のフィールドワークにもとづいて作成。

家畜の飼養に関して、もっとも特徴的なことは、樹木の葉を利用することだろう。すくなくとも、わたしが観察した期間においては、スイギュウの飼料の大部分は樹木の葉が占めていた。ウシやヤギについても、おなじような状況であるとみられる。飼料木として、カルシュ（コナラ属）、タツパ/別名リシェ（モチノキ属か）の2種がとくによく利用されていた。わたしが滞在していた家では、枝うち（ガス・カティヌ）は、基本的に毎日おこなわれていた。



カルシュ (*Quercus semecarpifolia*)



タツパ/リシェ (*Ilex dipyrena* かもしれない)

樹木の葉のほかに、穀物のひきわりを炊いたもの（コレ）と残飯も、まいにちスイギュウにあ

たえられていた。ウシの場合には、ムギわら、トウモロコシの皮をたべさせる例もみられた。3-9月 は放牧地の牧草が生育するため、これもスイギュウとウシの飼料にすることができる。6-8月の長期放牧の時期には、集落からはなれた畑でスイギュウを放牧して、生育したジャガイモをたべさせることがあるという。ジャガイモ・トウモロコシの収穫後に畑にはえる草も飼料にする。

(4) 家畜の利用

スイギュウはもっとも一般的な家畜であり、乳を利用するほか、食肉にもするそうである。畑をたがやすのにはウシをもちいる。しかし、ウシを飼うひとはそうおおくはない。その理由は、ほとんどのひとは牛肉をたべないから、と説明された。ヒンドゥー教による牛肉食の禁止と関連しているのだろう。ウシを飼っていない家では、畑をたがやすとき、ウシをもっているひとをわざわざよんで、かわりにやってもらう。

畑をたがやすときは、牡ウシ 2 頭にスキをひかせておこなう。このとき、畑の下段から上の段へスロープをつたって、スイッチバックしながら連続的にたがやしていくのである。ここでつかわれるスキは木製であり、土をかく先端だけが金属板でおおわれている。スキいれは男の仕事である。



トウモロコシ畑のスキいれ

家畜のふんは、肥料として利用される。わたしがみたのはスイギュウだけだったが、おそらくウシの場合も同様であるとみられる。家畜小屋の床にたまったふんと枝葉を、畑のすみにつんで発酵させ、スキいれのまえに畑にまいて肥料にする。道路におちたスイギュウのふんをひろいあつめて、畑にはこぶ例もみられた。

かんがえるに、スイギュウを飼育する目的のうち、もっとも重要であるのが、この肥料の供給源とすることなのではないか。乳の利用は数日にいちどで、食肉にすることはめったになく、ウシのようなスキいれの動力にすることもないとすれば、その利用目的はおのずと限定される。あるいはスイギュウを売買することで現金収入をうることもあるのかもしれない。ただし、これらはすべて憶測であって、根拠はない。

(5) 不作・獣害・耕作放棄

滞在中、なんどか降雪・降雹をみる日があった。きくところでは、この季節に雨・雪がおおいは昨年か一昨年からで、むかしはそうではなかったという。近年では、6-9月の雨季だけではなくて、一年じゅう雨がおい。

雨がふると、さむくなって、作物のできに影響する。ジャガイモ、トウモロコシ、マメの収穫

が減少したそうである。ベニ、タトパニ、ガーラのようなあたたかい場所なら、雨はむしろありがたいが、チトレ、ファラテ、スワータのようなさむいところでは、雨がふるとこまる、といていた。

8月ごろになると、山から野生動物がやってきて、畑の作物をくいあらしていくという。トウモロコシがとくに被害をうけることがおおい。

段々畑の一角が灌木の林になっているのをみた。畑はほうっておくと4-5年でやぶになる、ときいた。数世代まえまでは畑だった土地が放牧地にかわっているところがあった。それでも、わたしがみたかぎりでは、耕作放棄はある程度の段階でとどまっているようだった。宿泊業にかかわるひとは一定数いるが、いまもなお生業の中心は農牧業にあるとみられる。

* この地域に関する日本の文献では、シーカ谷という呼称がよくみうけられるが、これは現地でもちいられていることではない。この報告では、ゴル・コーラ川（Ghar Khola）の谷だから、ゴル・コーラ谷とよぶことにした。ただし、これも便宜上のよびかたであって、現地のひとがそうよんでいるかどうかは知らない。

参考文献

小林茂（1980）「〈論説〉中部ネパール、マガール族の耕地制度と景観変化」『史林』63(2), pp.274-304.

土屋和三（1999）「ヒマラヤの森林・草地と土着の環境利用技術」『森林科学』25, pp.29-37.

今回の経験をどのように今後生かしていくか

ときおり感じたことは、どこまで調査者としてふみこんでよいのか、という葛藤だった。

チトレ村にいるとき、ある青年から、こんなことをきかれた。「きみはただ興味があるから、いろいろきいているのか。それとも、大学の研究のためにやっているのか」。わたしは、大学で地理学をまなんでいて、農業にも興味があると自己紹介していた。わたしは「興味があるからだ」とこたえたが、これはむづかしい質問だった。いちおう報告書をかくという意味では、調査にちかいてもいえるが、それはもともと純粋な興味があるからやっていることであって、そんなにかんたんにきりはなして説明できることでもない。

かれらにとって、わたしはとおりの客ではなく、なかばコミュニティの一員にちかい立場の人間だったとおもう。この人間関係ができあがると、調査者としての立場をしめすことにはためらいを感じるようになる。友人・知人になんでも遠慮なく質問をすることは、わたしにはできない。

このむづかしさは、人間を相手にフィールドワークをするなら、さけてとおることはできないのだとおもう。わたしは、日本国内のフィールドワークでもおなじような経験をしていたが、ネパールにいてみて、これはもうすこし普遍的な問題なのだと気づいた。今後、フィールドワー

クをつづけていくと、おなじむつかしさを感ずることがふえるだろう。今回の経験をもとに、この問題について、さらにふかかんがえていく必要がある。

渡航中、わたしは日記をつけていた。最初のころは、なにもかもがめずらしくて、あらゆることをできるだけわしく記録しようと努力していたのだけれど、1週間もたたぬうちに挫折した。そこで、やりかたをかえて、できごとのおおまかなインデックスと、詳細な記述とをわけることにした。とくに重要だとおもったことだけを、全体の記録とはべつに、くわしくかきのこすことにしたのである。これによって、記録作業は効率化し、内容の質も向上した。一見、ささいなことだが、この工夫がなかったなら、フィールドワークはどこかでいきづまったにちがいない。この経験から、わたしは自分なりの記録のとりかたを発明することになったのである。今後、本格的にフィールドワークにとりくんでいくなかで、この記録法は役にたつことだろう。

具体的な生産物としては、あらためて旅行記をかくつもりである。これは単行本に収録される予定もある。ほかにも、撮影した動画をもとに映像作品を製作し、公開することをかんがえている。

■ 本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

まずもって、協力してくれるひとをみつけることが、たいせつであるとおもう。これは、出発するまでに連絡をとっておくべきひと、現地で偶然であうひとの両方を意味している。どんな活動をするのかによっても事情はかわってくるだろうが、調査に類することをしようとしているなら、国内外の大学の研究者にまず連絡してみるのがいいだろう。

現地でたよりになるひとを、さきにみつけることができれば、なおよい。しかし、たいてい、そううまくはいかない。人間を相手にフィールドワークをする場合、協力してくれる現地のひとをみつけることが、最初の難関であるとおもう。よいひとにであうことができるかどうかは、偶然でもあるし、努力しだいでもある。がんばってください。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*ビザ、トレッキング許可証

*宿泊費、食費、雑費

*予防接種、海外旅行保険 など